

第15回福田徳三研究会
「福田徳三と近代中国」

武藤 秀太郎

・中国における福田徳三研究

確認できるかぎり、福田徳三を主題にあつかった中国語の研究としては、以下のものがある。

- ・劉綺霞「日本経済学家福田徳三経済思想述評」『山東工商学院学報』第20巻第3期、2006年6月
- ・劉綺霞「福田徳三及其経済思想」『中南財經法大学学報』2006年第4期、2006年7月
作者の劉綺霞は、大分大学出身。

・中国語訳された福田の著作

李大釗が『新青年』に発表した「私のマルクス主義観」（1919.5・11）は、中国語で書かれた最初期の本格的なマルクス主義研究とされている。「私のマルクス主義観」の前半は河上肇の論文「マルスクの社会主義の理論的体系」を、後半は福田徳三の『続経済学研究』などの著作におおいに依拠し、執筆されていた。こうした雑誌論文のほか、中国語に翻訳された福田の著作が複数確認される。

福田の著作を数多く翻訳した人物に陳家瓚がいる。陳家瓚は、いかなる人物であったのか。

・陳家瓚について

陳家瓚については、『民国人物大辞典』、『中国近現代人物名号大辞典』といった全国的な人名辞典をはじめ、『湖南古今人物辞典』、『湖南歴代人名詞典』など、彼の出身地であった湖南関連のものにも項目がない。かろうじて、他の人物に関する説明文に、その名が確認できるのみである。生没年も明らかでないが、一説には1870年、湖南の善化（現在の長沙市）に生まれたとされる。子美という別名があった。来日後の留学生活についても、ほとんど足取りがつかめていないが、金井延のもとで学んでいたようである。

陳家瓚が翻訳、解説した福田以外の著作も、複数存在する。

陳家瓚は留学中、1907年1月に東京で創刊された雑誌『中国新報』の編輯をつとめていた。『中国新報』は、第1年第1号（1907.1）、第2号（1907.2）、第3号（1907.3）、第4号（1907.4）、第5号（1907.5）、第6号（1907.7）、第7号（中国光緒33年9月初9日）、第8号（中国光緒33年12月初9日）、第9号（中国光緒33年12月初9日）と、計9冊発刊されている。陳が「編輯兼発行者」を担当したのは第7-9号で、以前のものと比べると、発行日に明治年の表記がなくなり、光緒年のみとなっていた。また、第1-6号の「中国新報社編輯所」は「東京牛込区早稲田南町56番」となっていたのに対し、第7-9号では住所の記載がなく、あらたに「東京神田区南神保町7番地」を住所とした「総経理処」が載っている。第8号の「本社広告」には、「総編撰員」であった楊度が帰国し、発行所を上海に移したことが記され、通信などは「総経理処」に送るように指示されていた。

・胡適について

福田は1922年8月、上海へと赴き、当地の日本人YMCAが主催した夏期講座を担当した。具体的には、8月25日から30日までの、27日をのぞく5日間で、中国語で「以経済学為背景之社会問題」というタイトルがつけられていた。この講演では、主催者との間でトラブルが発生したようである。

講演後について、現地の『民国日報』は、福田が9月2日に杭州の西湖を遊覧し、翌3日に青島へ向けて出発、青島で経済学を1、2日講じてから、天津へと赴く予定であると報じている。この間、実際の旅程は定かでないが、福田が9月25日、天津の南開大学で講演をおこなったことが確認できる。講演には、梁啓超がかけつけ、「日本における学問道徳の最高人」と福田を紹介した。福田は英語で講演をおこない、500人あまりの聴衆から拍手喝采を浴びたという。

その後、北京へと移動した福田は、胡適を訪問し、北京大学での講演を依頼され、快諾している。

【資料1】胡適の日記にみえる福田の動向

「日本の学者である福田徳三が来訪。彼は、新人会の領袖である吉野徳三とならび称されている。私が彼に大学での講演をお願いしたところ、彼は承諾した。」(9月29日)

「午後、家にて、(陳)独秀が突然あらわれた。私は驚喜し、長時間話をした。夜は銀行公会へ。銀行界が福田徳三を食事に請い、我々に陪席するようさそったのである。」(10月3日)

「二時、福田徳三博士が『マルクス主義の根本思想 とくにボルシェビキとの関係に着目して』と題した演説をおこなった。私が司会をつとめた。彼は2時間半話し、(陳)惺農が翻訳した。彼の態度はごう慢であるが、話の内容は公平な批評だったといえる」(10月4日)

「12時、東興楼にて福田博士を食事に招く。食後、彼はつぎの2点を述べた。(1) 彼は中国の前途になんら危険はないと考えている。緩慢であるが、実のところ障害はない。資本主義の文化は、すぐに過去のものとなるだろう。世界の新文化は、非資本主義の新文化で、ロシア、ドイツ、中国の三国を主体としなければならない。(2) 彼はかつて、自ら洗礼をうけたが、キリスト教に反対する者である。すなわち、本来の信仰に反対するのではなく、「制度化」されたキリスト教に反対するのである。彼は、Protestantismが資本主義の宗教だという。Protestantismは、(借金に利息をとるような)資本主義に反対した中世キリスト教の教訓を否定し、資本主義に一種の道徳的基礎を提供し、資本主義を成立させたのである。」(10月6日)

北京大学での講演は当初、二回を予定していたが、福田が体調不良を訴え、10月4日の1回のみに変更された。『北京大学日刊』に掲載された告知では、講演タイトルは「マルクス主義におけるいくつかの基本観念」で、胡適が司会をつとめた。

【資料2】胡適による開会、閉会の辞(『申報』1922年10月8-9日)

「(福田) 博士は、経済学においてきわめて奥の深い研究をしているだけでなく、経済学の知識を一般社会に広めようと、よく通俗的な文体で『国民談話』などの小冊子を書いている。平生のマルクスの学説に対する研究も非常にすぐれている。大正 7、8 年の間、日本で黎明会が成立した際に、博士はまさきにその発起人となった。まさしく東方における第 1 流の学者である。」

「我々は福田博士の講演を聴き、非常に多くの教訓を得た。(1) 近年、国内でマルクスの学説を高談する者は、マルクスを真に理解するに至っていない。今日、博士の講演で得た利益は無窮のものといえる。(2) 国際間における掠奪者の廃除を、ここで提起したことで、国民を呼びさませるであろう。(3) 掠奪者層を廃止することで、さらに我々国民の努力を促すことができるであろう。」

福田の講演内容は、複数の中国メディアで報道された。

会場となった第 3 院大礼堂は、福田の話を知ろうと、大学内外から集まった 500 余名の学生であふれたという。福田も帰国後、講演の様子をつぎのように語っていた。

【資料 3】「国際資本主義打破の運動新たに勃興す 福田博士に共鳴した学生連」『大阪毎日新聞』1922 年 10 月 13 日

「その内容に立ち入って見ると思想問題に対する考察の如きは極めて平凡なものでマルキシズムかボルセヴキズムか何やら薩張り判らぬ様であつた、併し兎に角行詰つた支那を救ふのは新しい思想の力によらねばならぬとして一般に社会主義や共産主義に左傾して来て非常な勇氣と真剣さで研究して居る。最近ラツセルやヨツフエが入込んで盛にプロパガンダをやつたので一層此傾向が熾烈になつた、私も同大学でマルキシズムの根本思想殊にボルセヴキズムとの関係に就て演説した処多数聴衆が殺到して全く同大学創始以来の盛況だとのお世辞を受けた」

この『大阪毎日新聞』の報道に対し、反発したのが当時京大に留学していた周仏海であった。福田が 10 月 14 日に京大でおこなった講演会とあわせ、周は以下のような記事を書き送った。

【資料 4】仏海「福田徳三底中国人観」『覚悟』1922 年 10 月 20 日

「日本の一流経済学者である福田徳三が、中国旅行から戻ってきた。私は、彼が中国人を一体どう批評するのか知りたくて、聞きに行った。冷水を頭から浴びせられたような羞恥を感じたが、自覚もした。ここで、いくつか要点を紹介する。読者もこれをみて、羞恥を感じたり、自覚したりしてくれば幸いである。

彼が大阪毎日新聞に発表した談話は、中国の新思想運動から説き起こしている。彼はいう、「その新思想運動の領袖たちとじっくり話してみると、何も分かっていないように思えた」と。中国の「新思想運動の領袖」よ、あなたたちは「何も分かっていないよう」だそうですよ。

昨夜、帝国大学学友会で、彼が講演に招かれ、私も聞きに行った。彼は登壇するなり、「私は三ヶ月あまり支那にいったので、程度が前より著しく低下した。それゆえ、諸君は今

晩話すことを、支那人の話と思って聞いて欲しい」と述べた。中国に「三ヶ月あまり」行って、「程度」が「前より著しく低下した」。中国人の程度とは、一体どのようなものなのか。

彼はまた、「北京大学の学風は、Practice（実行）だけを重んじて、学問を重んじていない。しかし、実行には、学問の根拠が必要で、学問の根拠がなければ、実行はただの盲動となる」と述べた。北京大学の先生と学生よ、中国最高学府である北大の先生と学生よ、あなたたちは本当に学問を重んじていないのか。」

[資料 5] 章廷謙による胡適宛の手紙

「福田の議論が前後一致しないことをよく聞いているので、私は彼がどのような人間なのか本当に分かりません。かつての姑息な発言だけでなく、彼が最近、『大阪毎日新聞』や帝大同学会でおこなった言論を、北京大学第三院大礼堂のものと比較してみると、彼の筆鋒が誰を攻撃し、あるいは誰を擁護したいのか見当が付きません」

胡適は 1927 年 4 月、欧米旅行からの帰途、日本に 3 週間ほど滞在した。横浜へ寄港後、箱根や京都、奈良、大阪へも足を運んでいる。多くの日本人とも、面会をはたしており、中でも胡適にとって、印象深かったと考えられるのが、福田との会話であった。

[資料 6] 胡適「漫遊的感想」1927 年 8-9 月

「私は日本にいた時、馬伯援先生とともに、日本でもっとも有名な経済学者である福田徳三博士を訪問した。私は、つぎのようにいった。「福田先生、先生は最近欧州を遊歴して戻ってきたあと、思想・主張が大きく変わったとのことですが、この話は本当ですか」。彼は、「大きく変わったものはない」といった。

私は、「変わったものは、おおよそ何ですか」とたずねた。

彼はいった。「以前、私は社会政策を主張していた。今回、欧州から戻ってきた後、この種の妥協的、緩和的な社会政策を主張しなくなった。今は、この世に二つの道しかないと考えている。すなわち、純粋なマルクス社会主義でなければ、純粋な資本主義である。第三の道はない」。

私はいった。「惜しいことに、先生は欧州に着いてから遠出をしなかった。いっそアメリカへ行ってみたら、第三の道を見ることができたかもしれませんが、かなわなかった」。福田博士は、頭を振っていった。「アメリカには、私はあえて行かない。アメリカに行つて、私の学説が完全にくつがえされるのが怖いのだ」。

私はいった。「先生のこの発言は、私をいたく失望させます。学者は、事実を尊重しなければなりません。もし事実が学説をくつがえすのなら、我々はその学説を棄て、さらに満足のゆく仮説を求めなければならないでしょう」。

福田博士は、頭を振っていった。「私は、あえてアメリカには行かない。私は今年、五十五才になった。六十才になれば、私の思想は定まり、変えられなくなる。その時に、私はアメリカまで見に行こうと思う」。

この会話は、私に絶大なる刺激（絶大的刺激）を与えた。」